

座談会 大学職員の仕事と働き方について

司会：大学教員の仕事は研究を行ってその成果をもとに学生を教育するなど比較的イメージが湧きやすいと思います。それと比べると大学職員の仕事を定義し表現するのはなかなか難しいです。しかし教員と職員が協働して学生の教育指導を行わないと一人一人の学生を十分に育てることはできませんし、良い大学を作ることはできません。今日はお集まりいただいた大学の教員、職員、そして市民の方々に自由に発言していただき、大学職員の仕事は何なのか、その仕事はどうあるべきなのかを話し合いたいと思います。

職員 A：まず長野大学の職員の仕事の状況を紹介させていただきます。2017年に公立化して上田市が設置する公立大学法人が運営する大学になってから、書類の作成が職員の仕事の主な内容になり、学生と向き合い学生のために働くという面が減りました。上田市や法人の理事会に提出する資料の作成などが上司から指示され、その作成に追われています。期日までに適切な内容の資料を仕上げないと自分の評価に関わるので一生懸命やらざるを得ません。現在2026年4月の開設をめざして理工系新学部の計画が進められていて文科省に膨大な資料を提出しなければなりませんのでなおさら職員の書類作成の負担は増えています。それ以外にも一つの手続きに何度も決裁をとったり、本当に必要なのか疑問に思う事務手続きが増えて職員の負担は増えています。その結果学生と接し関わる機会は減っています。公立化してからの大学の管理方針は、教員は学生の教育指導に当たり、職員は事務作業を行うというような固い分業体制になって、「職員の仕事は事務を行うこと」と指導されています。その結果、職員の仕事からは学生と接し指導するという側面が減少しているように思います。職員に対する評価でも書類作成は評価しやすい対象ですが、学生と接して学生がどう変わり成長したかは目に見えにくく評価の対象にはなりづらいです。上司による評価は職員にとって重大なことです。職員自身も学生に接するよりは書類作成に労力と時間を割く傾向があるのかもしれませんが。

職員 B：評価の話が出ましたが、職員にとって一番気になることは人事異動です。多くの職員は自分が慣れた仕事からは離れたくないと思っています。しかし他課へ異動になった場合もなぜそういう異動が行われたのか上司からの説明はいつさいありません。

教員 A：私は大学の職員は学生と接するのが好きだから大学に就職したのだろうと勝手に思っていたのですが、実際にはそうではなく大学に就職する動機はいろいろあるようです。そうであっても学生と接してみると、自分と違う世代の感覚を学んだり、気さくに話し合える関係ができたり、自分の助言で相手が少し成長したり、いろいろ面白いことがあり充実感も味わえます。そういう学生との関係に職員の間で共通認識ができるといいのですが。

職員 B：大学の部局では総務とか経理とか直接学生と接しない部局もあります。そこに長期間配属されているとそういう認識や感覚は持てないと思います。

職員 A：多くの職員は上司から指示された書類を満足いく形で仕上げるために一生懸命仕事をしています。それでもせっかく大学職員になったのに学生と接する機会が少なく学生に直接かかわる仕事ができないことに苦悩している職員もいると思います。一生懸命仕事をしているのですが、何のために働いているのか見失っている気がします。

司会：そうすると職員の人たちは何を心の支え、心の糧として働いているのですか。上司からの評価を上げて管理職に昇進し、さらに上の事務局長をめざすということなのですか。

職員 B：上層部や上司に忠実に従って昇進に熱心な人もいますが、そういう人は少数だと思います。ほとんどの職員は上司から与えられた目の前の仕事をこなすのに精いっぱい、他のことを考える余裕はないのだと思います。そうやって仕事を仕上げればそれなりに達成感も感じられますし。

司会：それで本当に自分の仕事の意味と価値を感じられるのかな。職員がそのような仕事を行うことによって、中期計画の目標が達成されたり、文科省から新理工系学部の認可を得られたりして、上層部は市から評価され自分たちの地位も確保できるのだろうけれど、職員はその歯車として使われているだけではないのだろうか。職員の仕事は学生との関係で学生にとってどういう意味があるのかを掘り下げないと、その独自の意味と価値はみえてこないのではないかな。

教員 B：学生を指導していて手に負えなくなって職員の人に助けってもらったことは何度もある。教員はだめでもなんで職員だったら対応できるのだろうか。

市民 A：学生から見ると教員と職員では大きく違う。教員に対しては壁がある。学生を育てるためには教員だけではなく職員の役割が重要だ。

教員 B：自分では意識していないけれど、単位認定権を持っているということが学生との間では越えられない壁になっているのかな。

職員 A：確かに教員には話せないが職員の人には何でも話せるという学生はいます。

教員 B：教員とは違う学生との関わりに職員の仕事の独自の意味がありそうなのだけれど、公立化後の大学の運営体制の下では職員が学生と接して関係する機会が制限されてしまっ

ている。

司会：最近短期間で退職する職員が増えていると聞きますが、こうした仕事上の不満や職場の居心地の悪さが退職につながっていることはないのかな。職員だけでなく教員についても公立化後の離職状況を調べるのは大学の現状とそれに対する教職員の意識を考える上では重要な資料になると思います。

ところで学生は今の大学の状況についてどう思っているのですか。

教員 A：理工系学部の新設計画が発表されて新棟の建設も始まりましたが、他方では既存の校舎の老朽化が進み雨漏りや視聴覚機器の不具合で授業に支障をきたし、グラウンドも穴だらけで学生の間には不満があると思います。新棟の建設に伴ってサークルの部室を追いだされた学生たちもいて、活動の拠点を失い廃部するしかないという悩みも聞かれます。

市民 A：そういう状況で学生からは声が上がらないのですか。

教員 A：まじめな学生が多いのですが、そういう面での行動はなかなか難しいのではないのでしょうか。

市民 B：今は学生運動もありませんし、高校までの生活で自分たちで声を上げて問題を解決した経験がないのだと思う。しかし自分たちで行動を起こすことで問題を解決できるのだということを経験すれば学生たちはすごく変わると思う。教職員がその支援をできないのだろうか。

市民 A：教員は学生と接する機会がたくさんあるのだから学生からの声を聞いて問題解決に動くことはできないのだろうか。すごくもったいない気がする。

教員 A：考えなければいけない点ですね。

教員 B：大学上層部は何かにつけて「学生のため」と言うのだけれど、今大学が行っていることが、具体的にどういう様に「学生のため」になるのかがわからない。理工系学部の新設と新棟建設にしてもそうです。それらが具体的にどうして今在籍している学生のためになるのかわからないし、大学からの説明もありません。新学部が開設され新棟が建設されれば大学の評価も利便性も高まると漠然と考えているのですが、実際にはそれによって学生が煽りを受けたり置き去りにされている問題もあるわけです。上層部にとっては、市との関係もあってこれらの計画の達成が正面に置かれていて「学生のため」は二の次にされたり方便として使われているような気がします。上層部が学生から直接意見を聞いて

話し合う場としてキャンパスミーティングがあるのですが、この場も上層部の都合に合わせて管理されている節があります。

市民 A：今日紹介されたような学生の状況を教職員の間で話し合いの機会を設けて共有することが出発点ではないだろうか。そこから学生に対するより良い教育指導を行い、今の長野大学の運営の在り方を変える連携が広がり運動が進むと思います。

教員 A：残念ながら公立化してから教職員が自由に話し合う雰囲気は廃れてしまいました。以前は執行部が重要情報を教職員に伝えて話し合う場として全学教授会があったのですが、2021年に廃止されてしまいました。また田中先生が自らに行われた懲戒処分に対して2022年12月に訴訟を起こしたのですが、その後学内では箝口令が敷かれたような状況になって職場で教職員が自由に話し合うことが難しくなりました。それでも私たちが行っている「地域と大学を考える会」の活動が地域社会に広がり、上層部もその動きを気にして以前のように強硬で高圧的な態度をとれなくなっています。ご指摘のような活動を行う余地は生まれているので努力して情報の共有と連携の輪を広げて行きたいと思います。

教員 B：そのなかで学生と接し関係する仕事もつ面白味や魅力や価値を伝えていけたらと思います。学生のなかには私たちが思いつかない発想をする者もいますし、教員と職員が協働で指導に当たり尽力した結果、入学したときより明らかに成長して卒業する学生もいます。こういう学生と接することの魅力と価値を伝えていければと思います。

司会：今日話し合ってきた大学の現状から考えても、職員の仕事と働き方は「学生のために」を根本に置いてどうあるべきなのかを熟考していく必要があります。これは研究に基づいて教育を行う教員の仕事と働き方を考える上でも本質的な課題だと思います。今後も機会をみて、「学生のために」という土台から大学職員の仕事、教員の仕事、両者の協働、そして大学のあり方について議論を深めていきたいと思います。

本日はお忙しい中皆さんありがとうございました。

注：この座談会は「地域と大学を考える会」により実施されたもので、長野大学の元・現役教職員および市民が、大学職員の仕事の現状とあり方について話し合った内容を座談会形式で表現しています。発言内容は実際の発言に基づいたものですが、座談会内で示されている個人と実際の発言内容とは必ずしも1対1に対応するものではありません。